

佐々木 肇先生のご業績をたたえて

岩手県立大学盛岡短期大学部学長

塚 本 哲 人

本学部国際文化学科長の佐々木肇教授は、本年3月末日に、定年を迎えられ、退職なさいます。本誌（研究論集第6号）を佐々木先生のご退職記念号とし、そのご業績をとこしえに印したく存じます。

先生は、1934（昭和9）年、新潟県の生れ。1957（昭和32）年に新潟大学人文学部人文学科を卒業されました。その後、東北大学大学院文学研究科に進まれ、1960（昭和35）年に同研究科英語英文学専攻の修士過程を修了して文学修士になり、1963（昭和38）年3月には同博士過程を卒えて単位取得満期退学し、その直後の同年4月に、東北大学川内分校講師（英語）に就かれました。この1963年とはケネディ大統領が凶弾に倒れた年、その年から今日まで約40年の月日が流れました。1967（昭和42）年4月に東北大学教養部助教授、1981（昭和56）年4月に同教授と進み、1993（平成5）年に東北大学大学院国際文化研究科が新設されると、同研究科の教授としてアメリカ研究講座を担当し、同研究科長、評議員に選任され、東北大学を去る1997（平成9）年3月まで、創生期の同研究科の基礎固めに活躍されました。平成9年3月に東北大学を定年退官後、直に同年4月には東北大学名誉教授になられ、その平成9年度1年間は弘前大学教育学部教授を務められて、1998（平成10）年4月、新しく生れた岩手県立大学に盛岡短期大学部が創設されたのに伴い、現職に就任されました。以後現在まで、6年の長きにわたり、新創の国際文化学科発展のため、細部にも心をくばられ、文字どおり寝食を忘れて力を尽くされたのでした。

研究意欲がひと一倍高く、職務上の教育分野にもとりわけ熱心な先生は、東北大学時代に、講師就任時におけるフルブライト給費大学院留学生として公民権運動たけなわの年に米国に留学されたのをはじめ、その後に、米国への出張3回、研修や調査にも各1回ほど米国へ出掛けられていました。さらに、学会活動としても、アメリカ文学会関係、例えば同学会の東北支部長などの役員にも数多く就かれ今日に至っています。また、盛岡時代においても、岩手県内市町村の国際交流の共同調査の関係や教務上の必要、さらには人事関連の要務などで、国境を越えて海外出張されることも多く、労をいとわず国内外の出張を精力的に実行されたのがきわめて印象的です。

先生の研究業績は広般に及んでいます。アメリカ文学の展開がその研究関心の焦点に常にすえられていることは言うまでもありませんが、専門を異にする者には必ずしも充分わかりきるものではありません。それだけに、論評はできないし、ましてや評価などということは論外というべきでしょう。ただ、アメリカ文学について、専門論文、概説書、辞典をと、多様な業績を挙げてこられ、それぞれの世界で高い評価を得たものが少なくないと聞いています。

先生は、国際文化学科の初代学科長として、その準備段階から、設置後の人事、教務上の万般にわたって、主導的な役割を果たされました。新創期の学科長として、十二分のキャプテンシーを発揮されたということに外なりません。郷里新潟を出てからの先生は、その時々に必要な研究教育の道に熱中して、ひたすら進まれてこられたようにお見受け致します。したがって、本年の年賀状に、これからは「人生を静かに楽しみたいと思っている」としるし、それは、「『帰らんいざ』の心境です」とも書いておられます。これからの先生の人生にしあわせ多きことを祈念して、筆を擱きたいと存じます。